



「調停」のお仕事

てすん@砲雷ね-15

それは、2018年晩秋のこと――

↑ ↑ ↑

「ウイリアム、その子か？ 例の……」

メードストーンにあるヴァンキツシユ家の屋敷。応接間に通された男は、入室してきた少女を見るやいなや言った。

「ああ、そうだ。ほらオリヴィア、挨拶して」

「こんにちは、ジョツシユさん。オリヴィア・ヴァンキツシユです」

「お利口さんだな。歳は？」

「九歳です」

そう答えるオリヴィアに、ジョツシユと呼ばれた男の表情はかすかに曇る。

「……そんな顔をするなよ、ジョツシユ。この期に及んで、良心の呵責に苛まれたのか？」

「君は平気なのか、ウイリアム」

「……任務だからな。平気なわけがないだろう」

ウイリアムは彼の態度に軽い苛立ちを覚えた。口調は穏やかなものの、つい責めるようなことを言ってしまう。だが、それも仕方のないことだった。この仕事を始めてから、やりがいを感じたことは一度としてなかった。今回におい

ては特に、自分がプロジェクトの中で最も重要で最も損な役回りを押し付けられたとさえ思っている。それに関わっているジョツシユの態度は、偽善そのものだった。

「で、標的は？ オリヴィアの初仕事にふさわしい相手なんだろうな？」

「標的はこれだ」

そう言って、ジョツシユはタブレットを取り出した。防犯カメラと思われる映像と、被害者の写真が表示されている。

「これは……ひどいな」

オリヴィアの両目を隠して、ウイリアムは呻く。

「……うん、ああ。ひどいもんだ。現代の切り裂きジャックとでも呼ぶべきだな。名前も年齢も性別さえ不明。映像にちらりと映っちゃいるが、こんな風体ではな」

フード付きのロングコートが、全身の体型を覆い隠している。

「手がかりはこの映像と、被害者の傷口と、彼等の素性だけ」

「待ってくれ。これは警察や保安局の仕事じゃないのか？」

「相手が神出鬼没なのと、獲物がちと厄介だね。警察もほとほと手を焼いている。同じ理由で保安局も手を出しづらい。だから我々の元に来た」

「部長はなんて言ってる？」

「実戦テストだと息巻いていたよ。このプロジェクトには金がかかっている、失敗はできん、とね」

呆れたようにジョツシユは肩をすくめた。

オリヴィアの前なので舌打ちは我慢する。

「保安局が手を出せない理由がわからない。標的について、何か調べが付いているのか？」

「具体的にはまだ。ただ、鑑識によるとこの傷口は、包丁やナイフでやられたものではなく、もつと鋭利なものでやられたものと言っていた」

「例えば？」

「例えば……サムライソードのような」

もったいぶった含みは、下手をすれば外交問題になりかねないことを示唆していた。国内のテロリストが相手であれば、保安局が動ける。だが――

「日本からは今、使節団が来ていたな」

「そう、平和のための使節団だ。だが、彼等の国の武器ともしきもので人を斬りまくっている。それも、路上生活者と外国人を」

「EJから離脱する我が国に対し、平和的経済協力を口実にすり寄ってくる連中にとっては、いい当てつけだな」

イギリスに武器は持ち込めない。日本刀も当然持ち込め

ない。とすれば、現地で非合法に作るものが一番手っ取り早い。メンテナンスも行える。だがそれには、技術者が必要で、もし仮に凶器が日本刀であるなら、日本の刀匠が関わっているはずだった。そして、それがイギリス国内で社会の分断を煽ることに使われているとしたなら――

「その通り。彼等はそれを望まない。そして、我が国もそれを望まない」

大まかに状況を把握したウイリアムは、一つの問題点を提起する。

「言いたいことはわかった。だが、神出鬼没な相手に狙撃で対応するのは無理だ。狙撃ポイントの選定は、場当たり的にはできない」

「わかっている。だから、誘い出すことにした」

なだめるように手を広げるジョツシユ。だが、「誘い出す」の意味に思い当たったウイリアムは、露骨に軽蔑の表情を見せる。

「まさか……」

「そのまさかだが、最初に言っておく。俺の案じゃないぞ。採択したもの」

「これは、非人道的すぎるぞ。先進国の法治国家とは思えない手段だ」

「国家のためだ。女王陛下も憂いておられる。多少の犠牲

もやむをえん、だそうだ。罾を仕掛ける場所と日時が決まり次第、また連絡する」

上着を取り席を立つジョツシユの背中に、ウイリアムは吐き捨てるように言った。

「イカれている」

「……全くだ」

振り向かず短く答えると、ジョツシユはヴァンキツシユ邸を後にした。

後日。

ヴァンキツシユ邸のテラスで、作戦指示書を持ってきたジョツシユは二人に詳細を説明していた。

「数日かけて、ロンドン市内の路上生活者を一時的に收容した。外国人旅行者に限らず、住人たちにも夜会外出禁止令を出した。人払いをした上で、ポイントゼロに罾を仕掛ける。釣り針は『移動をしなかった路上生活者』だ。もちろん本物じゃない。職員が偽装している。狙撃ポイントはここ。射線を確認でき、風の影響も少ない。ただ、相手は相手だ。万が一に備えて武装した職員を配置させてはいるが、失敗すれば職員の命はないだろう。凶器の扱い方は素人のそれじゃない。できるか？」

身を乗り出して説明するジョツシユ。ティーカップを置

いて、ウイリアムはつぶやく。

「最低な作戦だな」

照準の狂い、夜間という時間帯、撃つタイミング、どれを取ってもミスが許されない。初仕事の幼い少女に背負わせる重圧じゃない。だが、お膳立ては既に整い、こちらに拒否権はない。それも含めて「最低」だった。

「できるわ」

幼くも凛とした声は、利発さを裏付けるようにはつきりと断言した。

「やらないといけないでしょ？ わたしにはお金がかかっているから。部長さんがいつもお義父様に言ってる。だからやるわ」

「オリヴィア」

オリブ色のまつすぐな瞳でジョツシユを見る。本来であれば、この年齢の子はもつと自由で奔放な輝きを持っていてもおかしくない。だが、オリヴィアの瞳の輝きは違い、抑圧された覚悟の中で己の存在証明を果たさんとする、生命の足掻きにも似た輝きを持っていた。

学校にも通えず、同年代の友人もおらず、機関の用意した敷地内の移動と教育者たちとのレッスンの日々を与えられた少女。実の両親は事故で既に他界しており、そのままでは施設暮らしだった彼女の未来と、生活の不自由はほと

などないとはいえ、一般的な生活とは程遠い、政府専用の暗殺者として育てられて、なおかつ実績が認められない場合は抹消されうる立場にいる現在の彼女と、果たしてどちらが幸せだというのか。

ジョツシユは改めて、自らの立つ場所の意味を理解し、息を飲む。

そんなジョツシユからふいと視線を外し、傍らのウイリアムを見てつづける。

「そのかわり……欲しいものがあるの」

おそろおそろ取り出したタブレットには、59の値がついた大きなウサギのぬいぐるみの通販ページが表示されている。

「これが欲しいのかい？」

無言で頷く。その仕草はすぐ年相応で、二人の罪深い大人は少しだけ救われた気がした。

「GO! GO! ウサちゃんの抱きぐるみ……だめ？」

ウイリアムは優しく笑い、頭を撫でながら承諾した。

「いいよ。仕事が終わったら一緒に買いに行こう」

その言葉に、弾けるように明るい表情になったオリヴィアは、興奮気味にはしゃぐ。

「ほんと？ わたし、がんばる！」

翌朝。BBCのニュースで、連続殺人犯が特殊部隊によって射殺されたと報じられた。凶器を含めた犯人の詳細は不明として処理され、しばらくはいろんな憶測を語るコメントーターによってお茶の間を賑わせたが、すぐに忘れられた。もちろん、狙撃手オリヴィアは世に出ることもなく。情報はすべて、SISの中で眠っている。

「調停」のお仕事

発行日 2019年10月2日

著者 てすん@砲雷ね-15
<https://www.pixiv.net/member.php?id=3669242>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
